第５回館長講座　　「博物館での災害」

司会：今日は足元の悪い中、ご来館いただきまして、どうもありがとうございました。只今より、第５回館長講座「博物館での災害」と題しまして、鷹野がお話し致します。
　鷹野館長、よろしくお願い致します。

（拍手）

館長：はい、…次回が「博物館と事件」というテーマですが、事件と災害は区別しにくいところも少しあります。今回は特に自然災害と人災、人災というのは事件と重なるところが随分あると思うのですけれども、その辺はご了承ください。
　まず、自然災害。ここで取り上げようと思いますのは、津波・地震・水害です。私たちは非常に生々しい体験をつい最近、してきているわけですね。こうしたことはなぜか、途切れることなく起こっているような気もいたします。地震と津波と水害という大きな出来事に絶え間なく襲われているような気がいたします。
　これに加えて、火山の噴火の災害というのも、日本列島に住む私たちには避けがたいところもあるわけです。昨日は、長野県の御嶽山の災害がおきてちょうど一年目というところでした。
　火山の噴火については、博物館が直接大きな被害を被ったということは日本の場合あまりないと思いますので、ここでは取り上げないこととします。

　東日本大震災から４年半が経ちましたが、まだまだ、様々な点で回復したとはとても言えない状況であります。
　半年近く前、今年の３月に仙台で行われました「第３回国連防災世界会議」に合わせて作られた冊子からのコピーを持って来ました。お手元にもその部分を大きくしたものを配布して頂いていますが、スライドの右側のところですね、これを大きくしていただきました。
　半年前での状況がこういうふうになっているということを、まとめてくれたわけです。私自身、４年半前の震災について、どういうふうに語れるのか、まだ語る資格もないと思いますけれども、ここはこういう状況を示してくれているというだけにさせてください。

　さて、過去にあった災害のうちでですね、博物館に直接かかわるところを紹介する形で話を進めます。
　1983 年の５月に日本海中部地震がありました。これは秋田県の男鹿半島の北西約 70 キロの海底でおきた、マグニチュード 7．7 という大きな地震です。この時も津波が起きたわ

けです。秋田県の能代港で 2m 近い津波、ここで取り上げる男鹿半島でも、53 ㎝の津波がありました。

男鹿半島に「男鹿水族館」という水族館があって、これは現在でもありますけども、これが罹災致しました。幸い建物の被害は軽微だったんですが、犠牲者が出てしまいました。

ちょうどこの時、「男鹿水族館」に勤務されていた細井さんという方が、かつて新潟地震、これは私が中学生の頃の地震でしたか、その新潟地震に出遭って、その時に津波も経験していましたので津波が来るのではないかと警戒心をもって海のほうを見ていた。そうしたら、津波がやって来たことに気が付きまして、直ちに水族館の館内放送で避難を呼びかけ、100 名ほど入館者がおられたそうですけれども、無事、退避できました。その館内の人たちだけではなくて、館外に出て、ハンドマイクで退避を呼びかけたそうです。

水族館の前の磯に、遠足に来ている子どもたちがお弁当を広げているという、そういう時間帯だったんですけれども、津波が襲ってくるということで、水族館の屋上からマイクで避難誘導を行った。その為に、子どもたちのほとんどが避難できたんです。

しかし、残念ながら磯で遊んでいたスイス人の観光客のかたが、そもそもスイスは山国ですから、津波ということに対する自覚もないし認識もない、おまけに避難を呼びかける言葉は日本語だということで、そういうご自身の認識それから言葉の障壁ということもあって、避難ができず、残念ながら津波の犠牲となってしまいました。

そしてもっと古いところなんですが、これは古くで恐縮ですけれども、大正 12 年の関東大震災の時の、当時の東京帝室博物館の被害の様子です。この関東大震災の時には、左側の写真の建物、ジョサイア・コンドルの設計した旧本館という建物ですが、これがこのように壊れてしまいまして、使えなくなりました。スライドの右側の写真の壊れた瓦礫の前にたたずむ人は、玄関前の美術部職員という脚注がありますけれども、ここで記念写真を撮っているわけじゃなくて、彼らも呆然としているところだと思います。

これが建物の被災状況です。正面だけが壊れて見えますが、中ももちろん被災しております。このためにこの東京帝室博物館のコンドルの設計の建物は取り壊すことになりまして、その後、現在の東京国立博物館の本館が同じ場所に建てられております。

なお、この後東京帝室博物館は本館の建物が壊れてしまいましたので、この横に立っていた「表慶館」という建物、これは現在もございますけれども、これを主陳列館として展示活動は続けておりました。

この時の本館の中の様子はこんなだったようですね。右側、浄瑠璃寺の吉祥天像が倒れています。この程度の倒れかたで、ガラスを突き破るということはなかったようです。

それから、金銅仏も倒れる。それから、下の写真は漆工品、漆工芸品ですね、その展示ケースが壊れている。歴史資料の部屋は、かなりがたがたになるというか、ぼろぼろにな

ってしまうという状況だった、ということです。これらの写真は東京国立博物館で出しました『国立博物館　目でみる120年』、という冊子に載せられている写真から取っています。

また、こんな写真も載っていました。下にあるキャプションは「江戸城大瓦(おおかわら)を仮小屋」、と書かれていて、右から左に書いてありますけれども、江戸城の瓦が展示されているところに今、仮住まいの場を持った、ということなんでしょうか。ちょっとわかりにくいかも知れませんが、多分お母さんがいて、子どもたちがここにいる、避難してきた人たちがこういう場を使っていた、ということで博物館の構内も避難者の避難場所になったということがわかります。

そして、その東京帝室博物館の隣にありました動物園、現在の上野動物園の状況なんですが、関東大震災、この時には、動物にも来館者にも被害はなかったので幸いでした。しかし、上野公園自体が避難所になったということもあって、動物園は閉園の措置を取りました。

ただ、起きたできごととして、1919年に動物園にやってきたメスのカバの京子、これが非常におびえてしまって、カバは水の中で生活していますけれども、水の底に潜ったまま、出てこない。時々、浮かんできて呼吸するだけになってしまった。餌も食べない。非常に心配されたんですけれども、三日目の朝、ようやく大口を開けて餌を食べ、まわりをホッとさせた、ということがありました。

それよりももうちょっと大きな問題になってしまっていたのが、「暴れ象」と書きましたが、象の措置だったんですね。1888年にシャム、現在のタイの王室から明治天皇にペアの象が送られてきました。

そのうちのオスの象なのですけれども、ペアで来ましたので、オスとメスがいたわけですが、メスは送られてきて5年後の1893年に死にまして、その後、オスのほうが「暴れ象」と呼ばれるようになってしまいまして、しばしば、飼育係を負傷させたりもしていました。なぜか、オスもメスも名前が残っていないのだそうです。単に「暴れ象」という名前でしか残ってないという、かわいそうな象なのですけれども、暴れるものですから、この写真のように、杭(くい)が立っていますが、この杭にずっと鎖でつながれて飼育されていた。これを見た外国人が抗議文を出した。つまり、明治天皇に送られたものについて、こんな虐待みたいなことをしていいのか、という抗議、でもあったようです。

ちょっと余談ですが、こういう時、欧米の動物園ではどうするかというと、手に負えなくなると、さっさと殺しちゃうんだそうです。日本の動物園ではそういうことはしない。なんとかして、動物園で生を全うさせる、生かしておくというのが大きな方針なのだそうです。

だからこれも、外国人の抗議というのも、本当にかわいそうだ、というだけなのか、か

わいそうだから、さっさと殺してしまったほうがいいという、安楽死とか、そういうことをしたほうがいいんじゃないか、という抗議でもあったのかも知れません。

この象に関してはどうしようもないということで、やっぱり殺してしまおうということになったんですね。ただ、「暴れ象」対策として、ちょうどこの関東大震災があった 1923 年の段階では、この象の為にもっと頑丈な象舎、運動場を作ろうという計画はされていました。ところが大震災ということでこれが延期になり、こうなるといよいよ手に負えなくなるから、仕方がない、殺処分しようという判断をしたのだそうです。

どういうふうに処分するのかということについては、このころ尾張の徳川家の当主で、猛獣狩りの殿様として有名だった徳川義親(よしちか)侯爵に射殺を依頼したのだそうです。この徳川義親(よしちか)侯爵は、マレー半島に行って虎狩りをするようなことをした殿様の末裔で、有名なひとでした。

しかし、その徳川侯爵からは断られて、また徳川侯爵からの斡旋もあってですね、この震災の時に動物のほとんどを失ってしまった浅草の「花やしき」に、「花やしき」というと現在は遊園地で有名なんですが、この頃は動物園もありましたし、その「花やしき」のほうに移して、そこで飼育してもらおうということになったわけです。

しかし、「暴れ象」ですので、輸送はちょっと大変だったということです。箱の中に入れられていますけれども、この箱の中に入れる為に、バナナとかパンとかなぜか大福もあったというんですけど、好物だったのかも知れませんね。

これらを山のように積んで、誘導して、12 月 4 日から作業を始めて、ようやく 12 月 7 日の夜の０時半に箱の中に入って、それから８頭の牛が引いて上野から浅草まで移動して午前５時ごろ「花やしき」に到着しました。この「暴れ象」は、「花やしき」で９年生活をして、1932 年の 10 月 6 日、62 歳で死亡したということです。この数字というのは、当時の象の飼育の最長記録だった、といわれております。

そして、割合近いところですけれども、阪神淡路大震災では、博物館が震災で被災する、あるいは震災などの影響を大きく被(こうむ)るのだということが強く自覚されるようになったのはこの時からだったかなと思います。

「神戸市立博物館」の例をお話し致します。「神戸市立博物館」は神戸の三宮の駅から少し海のほうに行ったところにあります。旧館と新館がありまして、その旧館と新館がエキスパンション・ジョイントで繋がれています。直接かたくがっちり繋がれるのではなくて、少し流動性のあるような動きのあるような伸縮継ぎ手で繋がれているという構造でありました。旧館と新館共に建物の躯体(くたい)自体は多少クラックが外部･内部で見られたくらいで、建物そのものの致命的なダメージはなかったようです。

しかし、正面の入口がある東側の面、ここは外構が最大 25 ㎝ほど沈下して、それから南

面はドライエリアの擁壁が少し傾いた、という被害がありました。なかでも大きな被害として挙げられたのが、南西部の新館と旧館の取り付け部分の地下床で発生した液状化でした。旧館と新館の不同沈下と湧水によるもので、液状化による噴砂と湧水はエキスパンション･ジョイント部に集中していました。

地震のときにこの噴砂が地階では 2 メートル以上の高さまで吹き上げたといわれます。砂の噴出量の多いところではコンクリートの床を割ってしまって、最大 30 センチほどの砂が堆積したという状況が見られました。それからまた、地階では 15 センチほどの浸水があったということで、その後、湧水が続きまして、一時機械室の中では 180 センチも浸水した、という状況でした。

このように建物の躯体そのものには影響がなくても、その他のところでいろいろ障害が出て来てしまいましたので、約 1 年間休館しまして、ちょうど 1 年後の平成 8 年 1 月 17 日に再開館しています。

建物の中、展示室などの状況では、展示資料そのものはあまり被災していませんでした。展示室の中の展示資料、これはケースの中を若干移動した程度で止まっている。幸いなことに、損傷はほとんど認められなかった。ただ、倒壊した大型ケースに展示していた資料については、若干、傷を被ったものがあったということです。それから、版画や地図などが収納されていましたマップ・ケース、これは全て倒壊しましたけれども、しかし、ケースの中に資料が入っているということでしたので、資料にはほとんど影響はなかったという幸いな状況でした。

その他、屏風棚から飛び出した屏風が損傷するというような状況もありましたし、収蔵庫の中では、陶磁器・鏡・版画など 25 点ほど損傷したものがあったんですが、幸いここに書きましたが、全収蔵資料が 34000 点ほどで、それから見たら、0.07%というほどの割合での被害で済みました。全体の被害総数は 133 件 184 点ということでしたけれども、これらの資料は大破してしまって修復不能と、いうことになってしまった若干のガラス関係の資料を除いては、それぞれ専門家の手で修復されています。

この時の、阪神淡路大震災の時には博物館では、本来の教育施設としての役割の他に、神戸にありました動物園では、動物園のホールが遺体安置所として使われたり、復旧活動の自衛隊の駐屯基地になっていました。

水族館自体が避難所になったり、あるいは近隣の中学校の分校として臨時教室を設けて、授業が行われるというようなこともありましたし、同じようなことは最近の私たちの経験の中にもあったわけです。

中越地震、これも博物館には非常に大きな影響を与えた、というと何か一般的な言い方過ぎますけれども、インパクトがあった地震でした。新潟県の「十日町市博物館」。この博

物館の目玉は、後でお示ししますけれども、笹山遺跡から出土した国宝の火焔(かえん)型土器がありますが、これに重大な被害がありました。国宝のうち、深鉢型土器のうちの 20 点ほど緊急修理が必要な被害が生じました。国宝の整理室や収蔵室に収蔵していた土器なども、かなり被害を受けています。

この国宝の火焔(かえん)型土器は、免震台に置かれていたんです。免震台は当館でも使っておりますが、これに置かれていたんですけれども、残念ながら揺れの形が違ったということもあって、倒れて壊れてしまった、ということがありました。

免震台において、テグス、簡単に言うと、釣り糸ですね、透明な細い糸なもんですから、よく使われるのですけれども、それで留める、そういうのが横揺れの地震においては有効だったのだけれども、阪神淡路大震災のときの地震のように横揺れの地震ではよかったのですが、中越地震では直下型の縦揺れの地震だったこともあって、あまり効果がありませんでした。

こういう道具を使うことのほかに基本的にですね、土器の中に砂袋を入れておくとか、少し重心を低くするということですね、そういうことをするとか、あるいは、倒れても被害が少ないように、紐を棚に張っておくとか、それらの行為がある程度、有効であることもまた明らかになりました。

「十日町市立博物館」ですが、この建物は建て直すのだそうです。国宝の笹山遺跡出土品がまとめられていまして、この写真は中越地震の後の、修復された後の展示です。国宝ですので、いかにも国宝だぞ、っていう展示がされていまして、真ん中の、火焔型土器も。

このように免震台に乗せられています。それからこれも見えにくいけれど、なんとか目をこらすと、…ここのところ、ちょっと見えますね。テグスの糸が貼られて、留められています。免震台に乗せて、そしてこの五徳で支えて、さらにテグスで留める。こういう方式がかなり有効だということが、いろいろな実験の結果わかってきています。

もちろんこれの中には重りを入れておくので、砂袋というのもありますし、丹青社(たんせいしゃ)という会社が作った、大学の学芸員課程の実習用のビデオの中にはですね、散弾の玉を入れる、という何だか恐ろしげなことを説明していますが、要するに散弾の玉ですから小っちゃい鉛の玉ですね、重いというのと、砂と同様に形がグニャグニャ変えられるので、こういうものの中の重りには適当だということで使われていたんだと思います。

とにかく、ひとつひとつ気を遣ってやっておくというのが、土器などが倒れないようにする為には有効だ、ということです。

そしてこれは、イギリス・ロンドンにあります、「自然史博物館」で、震災の展示をしていまして、日本語で書いてあります。「震災の惨状」。左のほうに、この展示セクションは 1995 年、関西・神戸大震災に焦点を当て、人口過密地域で起きる震災による凄まじい被害

を伝えます、ということが書いてあります。
　しかし、展示はそんなんじゃなくて、スーパーマーケットがありまして、この右下の写真はスーパーマーケットの商品が置かれている様子で、少し実際と違いますよね。もうちょっと我々のスーパーマーケットは広いし大きいんですけど、まぁ、象徴的に展示してありました。

　このスーパーマーケットのケースが倒れていたとかいうような状況が展示室の一角に作られておりました。徳丸歯科というのは本当にあるのか、知りませんけれども。

　そしてまた、実際に自動車が潰されそうになっている様子だとか、右側のほうは地震への備えということで、いろいろありました。
　新幹線というのは、地震対策がされているんだよ、と。その新幹線の下の二つの写真の間には、日頃のネットワークというのがちゃんとできているからいいんだということなのですが、多分、原発の写真だと思うんですけれども、必ずしも安全で大丈夫ではないということも、よく自覚しなくちゃいけないところですね。

　このような震災への対応は、博物館ではどうしているのか。阪神淡路大震災以降ですね、建物そのもの、それから展示台、これを免震構造にするということが考えられて実施されてきています。しかし、新潟の中越地震の時にはこういったものが個々に別々になされたのではあまり効果が無い、ということも実証されてしまいました。
　先程の、新潟の国宝の火焔土器ですね、あれは免震台の上に置かれていたけれども、建物そのものが揺れてしまったということもあってこれは落ちて壊れてしまったわけです。
　それまで、中越地震の頃まで導入されていた免震台は水平方向の横揺れを吸収するというタイプが多かったんですが、縦揺れはだめだったんですね。阪神淡路大震災は横揺れが主だったということですけれども、新潟の中越地震は、これも最大震度７くらいだったわけですが、非常に強い縦揺れを伴っていたということだったわけです。
　この中越地震の後、いろいろ実験をして、阪神型あるいは中越型の地震というのを起こして、さまざまな展示方法を比較する中で、免震台を使って、五徳のようなものでちゃんと支えて、テグスで固定する。そうすると、かなり背の高いものでも倒れないということが実験的に証明されてきました。

　「九州国立博物館」ですが、これ 2 枚の写真を合成していますので、ちょっと変なのですけど、大体、こんな形ですね。

　この九州国立博物館は、最初から建物自体を免震にするということで作られていまして、これは収蔵庫とその上に乗っている展示室ですけれども、この下の赤く見えるところ、こ

れが免震構造となる構造の部分、実際こういうところなんですけれども、こういう揺れを吸収するためのいくつかの台があって、その上に柱がのっている。揺れがあった時にはこういったものでもって、揺れを吸収する。建物そのものを免震にする構造ということで作られています。

これは人が入っていますけど、ここのところは、九州国立博物館のボランティアさんによるツアーですね。展示ツアーでなくてバックヤードツアーかな。その中にこのところも含まれていまして、私にはこの博物館の三輪館長さんが案内してくださってとても自慢そうに見せてくれました。

こういった新しいものでなくても、古いことなんですが、東京の上野にあります国立西洋美術館でも免震ということが考えられています。国立西洋美術館の庭に立っています左側ロダンの「地獄の門」ですね。この「地獄の門」の置かれている台、これが免震になっていまして、ここから先は免震台座です、上がらないでください、と書かれています。

こんな構造になっているよ、というのが横に記されていました。耐震でなく、免震なんですね。ただ、耐震だと振動に耐える、耐えてもらっちゃ困るので、耐えるよりもやっぱりその揺れを免れる、言葉でいうとそういうことですね、そういう構造のものを作っています。そして支えています。

これだけでなくて、これも西洋美術館の庭にあります、ブールデルの「弓をひくヘラクレス」という彫刻ですけれども、これもこの台がやっぱり免震の台になっています。

また、相当古い早い段階で、この建物も免震ということをいっていまして、この国立西洋美術館の古い建物、これはル・コルビュジェの設計ということで、まだ実現していませんけれども、世界遺産にしようとフランス政府からの働きかけがあって、世界遺産になるかどうかというところなのですけれども、その建物の地下の部分にこういうふうに免震の構造を見せてくれるところがあります。全体を免震の台の上に乗っけているという構造。

それから、展示室の中でもこういう背の高い柱の上に彫刻を乗っけているわけで、揺れたら心配だね、って誰しも思うところですけれども、これ自体がやっぱり免震の台の上に載せておりました。

次は水害の話です。水害が起こって被る被害というのは、やはり資料への直接の被害、資料が水に浸かることで起きる被害ということがありますでしょうし、それから海岸地帯の博物館などでは、海水の害が、建物への害もあるし、資料への害、これは後まで影響が残るということがありますね。

建物の被害は、浸水だけならあまり問題はないのでしょうけれども、浸水したことによって電気系統に影響を及ばす。すると、電気系統に障害が出てしまいますと、エレベーターが動かないとか、空調が出来なくなる訳ですね。いろんなところに被害が生じて影響が及ぶところになりますので、これは大きい。また、電気系統はしばしば、地下にコントロールするところがあったりしますので、そういうところへの浸水というのが害をもたらします。

この水害についてだけではないのですが、博物館などが、こういった自然災害の被害を受けますと、その後、副産物というか、良いほうの副産物として、人々の意識の高まりがあって、レスキュー活動というのが一般化してきますし、それから資料一つ一つについての修復の技術の進歩というのも見られています。

水害の展示を探してみました。これは滋賀県の県立琵琶湖博物館という草津市にある博物館での展示なんですが、明治 29 年に洪水があって、この時、琵琶湖の水位が現在よりも 3.76 メートル上昇した、ということなんです。その結果、琵琶湖の湖岸一帯は 8 か月間にわたって水に浸かっていたという状況で、その時の様子というか、こんなだったよ、ということを示す展示です。

床から柱が立っていてメモリが打ってありますけど、3.76 メートルというところにゴミがくっついていますし、それから壁を見ますと、最初見たとき、なんでこんなところに襖(ふすま)があるんだろうと思たのですが、部屋の中をぐるっと見ましたら気が付きました。ここまで水が来たんだよということですね。この壁のところに桶(おけ)が貼り付いていますけれども、桶が水に浮かんで、こんな高さまで行ったんだよ、という様子を示しているんですね。そこにいる人の高さを比べても、3.76 メートルという相当高いところまで水がいったということを展示の中で示していました。

水害というと、私たちにも、身近な体験はたくさんあるでしょうけれども、特に博物館が非常に大きな害を被ったというものでいきなり外国のことですが、フィレンツェでの洪水がありました。

1966 年の 11 月 4 日の朝なのですが、この文章は正富理加さんという方が「芸術新潮」という雑誌の中に書いた文章なのですが、なぜ今、わざわざ名前を言ったかといいますと、実は教え子のひとりでありまして、イタリアに留学をして美術史の勉強をしていたんですが、残念ながら亡くなっていました。なぜか、大学を定年になるころになりますと、教え子というか、そういう人たちの中でも、先に逝ってしまった人たちのことを思い出すようなことがよくあります。これもちょうどフィレンツェのことと洪水のことを正富さんが書いていたな、というのを思い出しまして、それで、「芸術新潮」を探し出してそこからコピーさせてもらいました。

「狭いフィレンツェの通りを 3 メートルの高さは十分にある波が、時速６０キロメートルで押し寄せた。波は車や木を横倒しにして、運び去り、教会・住宅・芸術品に暴力的な損害を与えた。7 時 26 分に電気時計の針は止まり、電話も数時間後不通になる。泥水はすでにポンテ・ヴェッキオ橋（これは氾濫を起こしたアルノ川に架かっている古い橋です。）の上にまで増していた。サンタ・クローチェ聖堂をはじめ（サンタ・クローチェ聖堂は、アルノ川のほとりにある教会で、著名な人のお墓がたくさんある聖堂、教会。）川沿いの地区の水嵩（みずかさ）は最高 6 メートルにまで達した。大聖堂や洗礼堂の近くは自動車のオイル、家庭用暖房の石油、工業用のナフサ油の入り交じった泥水が渦を巻き、洗礼堂の「天国の門」を打ち破る。イタリア屈指の美術館ウフィツィの収蔵庫、考古学博物館、科学博物館、国立古文書館、国立図書館、など、いずれも歴史的・芸術的にきわめて重要な作品・資料が保存されている建造物にも、泥水が浸入する。芸術作品で被害を受けたのが約 1400 点、そのうち 800 点は損傷がひどく、直ちに保存作業をする必要があった。221 の板画、413 のキャンバス画、11 の連 作のフレスコ画、70 叫の独立したフレスコ画、158 の 彫刻、23 の写本がその内訳である。」

フィレンツェを象徴するこの、花の大聖堂といいますが、すぐこちら側にアルノ川という川が流れてこれが氾濫している様子ですけれども、そして、これの両側、これがウフィツィ美術館です。例のボッティチェリの「春」とか、「ヴィーナスの誕生」とか、著名な絵のあるところですけれども、ここの前、普段は大抵、お客さんの列がずらーっと並んでいる。あとは大道芸人たちが芸をしたり、お土産物屋なんかがあったりする、そこが泥水で冠水していました。

その後の処置なんですが、美術品に、これはまた正富さんの文章です。

「美術品に携わる人々―研究者、愛好者、修復士が数日間寝食を忘れて芸術品の救済に奔走したのも忘れてはならない。もし彼らが時機を逃していたら、上述の 800 点の美術品のうち、90%は失われていたであろう。人命同様、美術品の救出にも迅速さが要求される。

被害を最も被ったのは壁画だった。水が引いた後、表面にこびり付いた泥やナフサ油を染み込ませないために一刻も早く除去する必要があった。また、湿った壁面は地中から硝酸塩を吸収し、壁画の表面に結晶を作って表面を破壊する可能性が存在した。その為に利用されたのが、壁画の色素部（顔料の乗る部分）だけを壁から引き剥がして保存、修復する方法「ストラッポ」である。翌 1967 年は「ストラッポ」の 1 年だった。あわせて 1800 平方メートルに及ぶ壁画がこの方法によって救われた。」

結局、こういう災害の結果、正富さんのいうように「後世に生かされる経験としての多くの副産物も生まれる。例えば、壁画の引き剥がしの技術が緊急処置として実践されることで、画面の下から準備の為の下絵が見つかるなど、壁画の新しい研究分野が広がった。」

というようなことがありました。
　実際、この壁画の修復には日本が協力していまして、この為にイタリアから剥がした「ストラッポ」を持って来て、日本で修復する、ということもしました。ウフィツィ美術館が被害を被った非常に大きな出来事、災害として、「フィレンツェの洪水」ということは今でも語られるくらいです。街のなかにも、ここまで水が来たよ、ということを示すような表示があります。

　次にこの災害は、ネットで探したものですけれども、ドイツでのことで 2002 年の 8 月に集中豪雨があって、そこで川が氾濫して、美術館の地下にその水が流れこんだ為に、電気系統がダウンしてしまったということなんですね。「階段を使っての避難が不可能とされた 6 点の大キャンバスの運び出しができなかった」要するにエレベーターを使うことが出来なくなってしまったので、資料を運び出すことが出来なくなってしまったということで、しかし、幸いにもこれらは床に置かれていたのではなくて上のほうに置かれていたということで、浸水を免れることが出来たという結果でした。

　それから、これも最近の例で、去年ですか、台風 19 号で「きしわだ自然資料館」に浸水があった。去年の 10 月 16 日で、この資料館への浸水そのものは 10 センチくらいだったいうことで、あまり被害はなかったようなのですが、ここではその被害の様子とその後の復旧活動というか、これについての記録がかなり丹念に書かれていました。
　ここでは被害の様子だけ紹介しておきます。浸水は１０センチくらいで、これも電気系統への影響というのが懸念されたのですが、とりあえず冷凍庫と水槽の電源は生きていた、というので、すぐに復旧できた。それから、標本や展示物は 2F より上にあったということなので、これについては問題ないのだけど、1 階の水槽、事務所、多目的ホール、研究室、倉庫、こういったところは全面的に浸水していった。倉庫や事務所の床に置いたような印刷物は被害を被った。それから、多目的ホールの床マットはこれも吸水していた、そして電話は不通だった、と。それから、床下の配電用のパイプも浸水していることが予想されたのだけれども、この時点では、直接の被害はそこでは出てなかったということでした。
　これも、最近、都市型の浸水っていうのでしょうか、雨の量に排水の設備が追い付かないということもあって、浸水してしまったということですね。まだまだ、事例をあげていくとたくさん、話は出て来るのだと思うのですけれども、この位にします。

　次は、人災を取り上げてみます。人災のうちで、次回に盗難などについては取り上げますけれども、最大の人災というのはやっぱり戦争っていうことなのかなぁ、と最近は思います。
　戦争と博物館との関係ということで、東京の「帝室博物館」、それから、台北にあります「国立故宮博物院」のこと、ドイツのミュンヘンにあります「ドイツ博物館」、同じくドイ

ツにあった博物館の資料のこと、それから動物園と戦争ということを見ていきます。

東京帝室博物館ですが、今、こうやってあらためて追って見ると、博物館というところは大変な努力をしたんだな、というのと同時に、相当先を読んで行動しているんだなということが、見えてきました。

昭和 12（1937）年の日中戦争に始まる状況の悪化を踏まえて、「東京帝室博物館」、現在の「東京国立博物館」ですけれども、これは 1941 年、つまり昭和 16 年の 1 月の段階で、美術品の保護対策というのを考え始めているんですね。戦争によって文化財、資料に被害が及ぶだろうということを想定して、こういうことを始めました。

昭和 16 年の 1 月に、どういうことを決めたのかといいますと、戦争の災禍から美術品を守るために、美術品の分散・移送、簡単にいうと疎開ですね、これをしようということに決めます。資料を分散・疎開させる時期のこと、それからどういう資料を疎開させるのか、という資料の選定、それから疎開させるにはどこでもいい訳ではなくて、安全な場所が要求されるわけですけれども、そのための、どこに疎開させるか、という疎開先、それからまた、その疎開先にどういう施設を作るか、あるいはどういう施設を選ぶのか、また、どうやって運ぶのかというようことの協議がされました。

当面、最も貴重なものを優先させる、当然だと思うのだけれども、そして、警備の万全を期するという点からですね、疎開先については、当時の宮内省の御料地を優先的に考えようという方針が決まりました。

早速、昭和 12 年 8 月 18 日に第 1 回目の移送が始まるのですね。ここに書きましたように、館蔵品のうちの最優秀品 227 点、それから法隆寺献納物、この時はまだ、皇室財産でしたので、御預かり中の法隆寺献納物が 108 点、これを奈良帝室博物館の鉄筋コンクリート造の倉庫に移送致しました。

奈良帝室博物館に移送した、というのは、奈良はまだ安全だろう、という配慮ですね。京都と奈良については、よくいわれたのは奈良や京都という文化財の宝庫については、アメリカ軍は空襲・爆撃しなかったんだ、意図的に爆撃しなかったんだ、その為に努力した人もいた、というようなこともいわれましたけれども、必ずしもそんなに甘いものでなかったことは間違いない。たまたま空襲されなかっただけだった、というところもあるようです。

しかしまぁ、奈良に取りあえず移そうということで、この年のうちに合計 4 回移されています。

さらに昭和 17 年 4 月になって、敵機襲来率の可能性が少ない、これはどういうことから少ないかというと、近くに軍事施設がないとか、軍需工場がないとかいうようなことを配慮したのだということなのですが、現在の東京の八王子市の、横山村武蔵陵墓地内というところの倉庫を選びまして、そこにも資料の一部を移送しています。

どういったものを移したのか、といいますと、「常時陳列ニハ大ナル支障ヲ来サザル範囲内ノモノ」多分展示をしないだろう、というもの、それから、「同一種類ノ品数点アルモノ」重複しないもの、「同時代ニシテ品数多キモノ」、それから、「比較的移送容易ナルモノ」「比較的湿気ノ影響少ナキモノ」こういうようなものを選んだ。近代の絵画が 120 点、書蹟 20 点。それから、能や狂言の面などの彫刻 16 点、それから金工品が 100 点、陶器 30 点、漆器 60 点。それから狂言などの衣装の染織、これが 17 点。あと考古資料 300 点。こういうものが移されました。

この昭和 12 年の段階からこのようなことをやったっていうことも、ちょっと驚きなのですけれども、昭和 17 年 4 月、確かに太平洋戦争はもう始まっていましたけれども、17 年 4 月ってまだそんなに負けていない頃ですね、今から見ますと。決定的だったのは 17 年の 6 月ミッドウェイの海戦があって、そこで海軍がやられちゃって、戦局は日本にとっては悪化の一途をたどるということになっていくわけですが、それより前の段階でこんな努力をしていたわけです。

さらに逼迫してきた昭和 19 年 3 月、第 2 陣として、福島県の「翁島高松宮別邸」、これは猪苗代湖のところにあるものですね。ここに主として、神社仏閣とか個人から寄託されてきた国宝や重要美術品などを運んで移しました。

国宝 176 点、重要美術品 134 点を含む 352 点が移送されます。ここでいう国宝とは、現在の国宝とは違います。この段階での国宝は戦後、文化財保護法が出来た時にいったん全て重要文化財となります。その重要文化財の中からさらに世界的文化の見地から見てというような基準で国宝という現在のランクが作られているんですね。この段階でいう国宝は、今の基準に直せば、重要文化財以上のものと思ってください。

これらが移されましたし、それからまた同時に博物館に出陳・寄託されていた、つまり博物館が預かっていた資料を、これらについては持ち主に返そうという処置を取りまして、国宝 67 点、重要美術品 50 点を含む 206 点、これを職員 2 名一組で 13 組に分かれて 34 都道府県の地域に返却するということにしました。つまり、上野の「帝室博物館」の中に置いておくのは危険であるという判断の下にこういう措置が取られています。

疎開を要する資料はさらに多くを残していました。さらに移送保管の地を求めまして、京都府桑田郡山国村・同郡弓削村、京都府の北のほうですね、山国村の「常照皇寺」というお寺、それから、弓削村の「弓削旅館」。旅館の建物。それから、岩手県の二戸郡浄法寺町、相当、山の中ですけれども、浄法寺町の大森彦四郎町長の家とか、小田島閑二さんの家の倉庫。それから先程の翁島の「高松宮別邸」などへ移していきます。

昭和 19 年 5 月 4 日にこの疎開作業が始まりまして、5 月は 11 回運んでいます。6 月は翁島に 6 回、京都へも 1 回、浄法寺町へ 8 回に分けて移送しています。この 6 月の段階で大部分の移送が完了しました。この京都への移送の際には、もちろん鉄道当局、日本交通公

社、商工省、農林省や軍の協力もあったと聞いています。

この疎開した美術品は 8 月 15 日に終戦を迎えますと、東京へ返送されてくるわけですけれども、次々と戻ってきています。館の職員だけでは対応しきれなくて、学生たち、美術、工芸、考古学などを専攻する大学生にも整理の参加を呼び掛けて助けを借りたといいます。

疎開したもの全てが戻ってきたのが昭和 21 年の 7 月。非常に迅速に処理が行われたという印象があります。

この疎開作業とその返送作業の中で、先程の岩手県の浄法寺町に運んだ資料については、全く秘密のうちに行われたのだそうで、町の人たちはそんなことがあったことを知らなかった、というエピソードが残っています。夜中に到着して、夜中に運び出されるということで、この浄法寺町のものも含めて、1 点の損傷もなく、返送されています。

この間の博物館員たちの努力、これはもう、大変なものだったことがいえますし、別にこれは日本の博物館の「帝室博物館」の職員だけのことではなく、世界中の博物館の職員たちは、博物館に寄贈されている資料を守るために大変な努力を払ってきています。

次に、中国の「故宮(こきゅう)博物院の資料の旅」についてです。現在、北京に故宮というのがございます。天安門広場の奥ですね。ここには 1914 年に、清朝の審陽や承徳の離宮にあったさまざまな資料を運んできて文化財を陳列する「北京古物陳列所」という名称の一種の博物館の展示施設ができ、これが故宮の中の「文華殿(ぶんかでん)」「武英殿(ぶえいでん)」という建物に置かれて陳列されました。

その後、1925 年に北京の故宮の建物の中に「故宮博物院」が成立する訳です。

しかし、この 1925 年に成立した故宮博物院の資料、所蔵資料はこれから流転の旅をするわけですね。特に、日本軍の略奪を恐れて、各地に疎開していく。疎開して、太平洋戦争・日中戦争が終わってみると、今度は中国の中の内戦が起こる。国民党軍と共産党軍が内戦をする。その結果、1925 年成立した「故宮博物院」の資料というのは、多くが台湾に運び込まれまして、現在の台北の「国立故宮博物院」の中にあるわけです。この右の写真が、台北の「国立故宮博物院」です。

1925 年まで戻りますが、1925 年に「故宮博物院」が成立した。しかし、これが危なくなるという危機感を持たれるわけですね。1931 年の 1 月頃から、戦争の影響ということもあって疎開の準備が始まります。1931 年 9 月 18 日に柳条湖(りゅうじょうこ)事件が勃発する。そのことによって、疎開作業が本格化してきます。

故宮の資料が木箱で 13,491 箱、箱詰めされまして、移送を待つようになります。その他、古物陳列所とか、元代以来の図書館であるところの「国士監」等のものが 6,066 箱もあった。ということで、全部で 20,000 箱弱の、箱といってもどれくらいの大きさか、具体的な写真ないのですが、相当大きい箱。リンゴ箱とかそんなもんじゃなくて、このくらいの高

さがあるような大きな箱です。この中に梱包して包まれていきました。

これが 1933 年 2 月から 5 月の間に 13,427 箱が 5 つに分けられて、上海それから南京へ運ばれていきます。いったん上海に運ばれたものの運び先に使われたものが、フランス租界、租界っていうのは今はないと思うんですけど、例えば都市の街の中にそこだけ外国があるっていうところですね。簡単にいいますと。そのフランス領となってしまったところの中に病院の建物があって 7 階建てだったと、そこに階ごとに資料を分類して、保管したんだそうです。

この上海にいったん置かれていた資料のうち、優品をロンドンに運んで、初めての「故宮博物院」の資料の国外展覧会を開いたんです。「中国芸術国際展覧会」を開催しています。これは本当に逸品ばかりだったということで大盛況だったということです。この時に 80 箱、735 点を運びまして、この輸送には英国海軍巡洋艦「サフォーク号」が使われました。ここで軍艦を使ったというのは、多分、蒋介石の頭の中に残っていたのでしょうが、この後、南京から台北へ運び込む時もやっぱり軍艦を使って運び込んでいるんです。上海発でロンドンに行き、ロンドンから帰って来た 80 箱、これも含めて、上海も危険だということで、改めて南京に運び込むことになりました。

南京に倉庫を建てまして、そこに「故宮博物院南京分院」を設立して、運び込むことになりました。全部、移されました。

しかし、1937 年 7 月 7 日、盧溝橋事件が起きて、南京も危ないということになりました。日中戦争が全面的に始まったわけですね。そこで、南京に置かれていた資料をさらに疎開しようということで、3 つのルートで、それぞれ四川省の奥のほうに送られていきます。

故宮南京分院は行政院の命を受け、南路、中路、北路の三つのルートで文物を奥地へと避難させました。南路で運ばれた 80 箱の文物は、ほとんどが「中国芸術国際展覧会」に出展された逸品であり、武漢を経由して長沙、貴陽、安順の各地を経て四川省巴県に運ばれました。中路で運ばれた 9,331 箱は、漢口、宜昌、重慶、宜賓を経由し、最後に四川省の楽山安谷郷に安置されました。北路経由の文物は 7,287 箱あり、津浦鉄道に沿って徐州まで北上し、隴海鉄道で宝鶏まで運ばれた後、漢中と成都を経て、四川省の峨眉に運ばれました。

日中戦争が終わってこれらの文物というのはさっきの重慶を経て、いったん、南京に戻りますが完全に戻りきらなかったものもありました。

しかし、南京に戻った資料は国共内戦の中で、中国の共産党軍が揚子江を渡る直前の 1948 年の末から、南京の倉庫から 2，972 箱を選んで台湾に運び込みます。12 月 22 日、駆逐艦「中鼎号」というので、まず第 1 回目 320 箱 3,409 点を運びました。それから、翌年第 2 陣、第 3 陣というふうに運んで行くわけですけれども、合わせて 2,972 箱になるのですが、運ぶ予定の 6 割くらいだったということです。

しかしこれらの中には、先程何回も言いましたロンドンにまで行った逸品がほとんど運び込まれているわけです。

「故宮博物院」が台湾に移送した資料の総数は 23 万 1910 点が数えられました。

これはホームページからですけれども、昨年東京国立博物館と福岡の九州国立博物館で「台北国立故宮博物院　神品至宝展」、神の品、宝に至る、という展覧会が開かれました。6 月 24 日から 9 月 15 日まで、約 3 カ月弱で東京国立博物館で 40 万 2241 人、10 月 7 日から 11 月 30 日の九州国立博物館では、25 万 6070 人が来場した、ということです。

その時の目玉資料が左上の白菜、これは自然のメノウを使った彫刻なのですが、これは色を付けたのではなくて、そのままですね。色変わりをしている石をそのまま使って、非常に見事な白菜で、これにはイナゴかとまっているんですけれども、そういうものがあったり。それから右側、これは肉形石でこれは色を付けているんですけどね、やはり清代の。この白菜が東京でやった時の展覧会の目玉で、右側の肉形石が九州での目玉でした。両方とも、会期の半分ずつしか、出してくれなかった。

それから、真ん中にあるのは、清の乾隆帝の時代の紫檀多宝格宝匣、木の紫檀で作られていて、たたむと直方体になるのですね、そんなものがあったりします。この青磁無紋水仙盆は、えらく縦に間延びしている感じがしますけれども、現在東北歴史博物館では、これらに勝るとも劣らないともいっていいような、日本の人間国宝の方々の作品が「日本のわざと美」展で展示されておりますので、どうぞ、まだの方はどうぞご覧になって下さい。

そして、次は「ドイツ博物館」の空襲の被害です。「ドイツ博物館」というのは、ミュンヘンにあります。世界最大の科学博物館として有名なところです。

川沿いに建物が建っているのですけれども、ちょっとこの構造というか、建物の並びを記憶しておいて下さい。これが、第 2 次世界大戦の末期にミュンヘンの空襲の中で被害を受けました。

ちょっと見にくいのですが、左側に今の建物の概略が薄く示されています。そこにこれだけ爆弾を落とされたんだよ、という記載なんですね。

1944 年の 7 月 12 日の昼間の爆撃とか、44 年の 7 月 16 日、それから同じく 7 月 21 日の被害とか、12 月 17 日、1 月 7 日それぞれここに爆弾が落とされた。これを見ると、爆弾落とした奴は本当に悪い奴だな、というふうな思いになる。

ここに最初に行った 1994 年には、これをあからさまに示した展示室がひとつ、あったのですね。ドイツは戦争起こしたほうじゃないの？って思ってですね、それなのに自分の被害をこれだけ強調するっていうのは大した度胸だな、と思いながら、でも後で考えると、こうしたところというのは、爆撃なんか本当はされちゃいけないところなのに、と思いました。

それから右下の写真はこれもガイドブックに載っている被害の様子で、こんなにされちゃった、という。ドイツ人の執念深さっていうのでしょうか、これは元通りに全部直しています。その後まもなく、元通り、本当にきれいに直しているっていうふうに、そのことも合わせて記載されていました。

それから、同じく戦争との関係で、戦争の際に博物館が略奪を受けるということがよくある訳ですけれども、比較的最近の湾岸戦争、イラクがクゥエートに侵攻したやつですね、あの時もクゥエートの博物館が真っ先に狙われまして、その後のイラクのフセインをやっつける戦争の時にもフセイン自身が博物館を盾とするということがありました。

また、戦後のどさくさの中で博物館が略奪を受けるとか、アフガニスタンでもそんなことがありました。ここで示しているのは、そういう、庶民の、個人の略奪とかいうようなことではなくて、国家的な略奪行為です。でもナポレオンの時もそうですし、それから、ヒトラーのナチもやっぱり、征服すると同時に文化財の略奪ということをさんざんやってきましたし、戦争にはこうしたことが付き物なのでしょうか。

シュリーマンの秘宝がなくなってしまったという話。ご承知のようにシュリーマンという人は小さい頃読んだギリシャ神話、これを神話ではなく事実だと信じまして、一生懸命金儲けをして、大金持ちになって、晩年はその儲けたお金を使って、トロイの遺跡を発掘する、ということをして、ギリシャ神話、具体的にはホメロスという人の書いた詩の中に書かれていることが事実だったということを証明しようとしたのです。

トルコのヒサリックの丘の発掘の結果、紀元前 12 世紀頃のトロイア戦争で敗れたプリアモス王の蓄えたとする黄金の品々を発掘しました。現在では、紀元前 12 世紀のものではなくて、それより 1000 年以上前のものだということが明らかになっておりますけれども、しかしまぁ、大発見であることには変わりはない。

こんなことが許されるのかと思うことなのですけれども、シュリーマンは自分の奥さんをプリアモス王の黄金の宝物で飾っているわけです。これ有名な写真なのですけど、残っています。シュリーマンはこれをドイツに寄付しまして、ベルリンの「先史原史博物館」というところに展示されていました。この右側は展示されていた頃の写真です。シュリーマンの奥さんが身に付けている物が、展示されていることがわかります。

戦争の中で、1941 年の段階で、この財宝が 3 つの木箱に入れて移動することになります。最終的には、この写真のドイツの、ベルリンの動物園の中のツオー高射砲塔という建物の中に移されます。高射砲塔といいますけれども、上に高射砲が乗っかるのでしょうけれども、これは 1941 年の夏に建設されて、こんな建物なのです。城塞、お城のようなものですね。

ツォー塔は、一九四一年の夏に建設された三つの塔のひとつです。ヒトラーはそれらの

塔を、戦争後、ベルリンの地に生れるはずのゲルマニアと呼ばれる第三帝国の未来の首都の最初の建物とするつもりでした。これらのナチスの城は厚さ 2 メートルの強化コンクリート製の壁でかこまれ、爆撃に耐えることができました。窓は鋼鉄の鎧戸で保護され、市内への攻撃が行われる前に、多くの窓はレンガでふさがれました。塔は電気と水を自給し、12 か月間の攻撃に耐えられるだけの食糧と砲弾をたくわえていました。

高さ 40 メートルのツォー高射砲塔は三つの塔のなかで最大のもので、屋上には対空砲がならび、砲手の宿舎はそのすぐ下の５階にありました。病院は４階にあり、美術品は３階と１階に保管されていた。地下１階と２階には、 空襲時の待避壕と調理場、国営放送局職員用の緊急コーナーがあった。地下１階から６階までには、電気や水道の設備や通信設備、弾薬庫などがそなえられていた。高射砲塔の近くには、これよりも小さな司令塔があって、その屋上にはレーダーアンテナをそなえ、通信とレーダー管制のセンターとなっていて、小さい方のツォー塔 から、ドイツ空軍司令官が首都の防空を指揮した。

このツオー高射砲塔に今のシュリーマンの宝物の秘宝というか、これが移されていくわけです。このツオー高射砲塔に移されたのは、シュリーマンのトロイの秘宝だけではなくて、兵器庫からは、ブランデンブルク王とシレジア王の武器と具足、珍しい兜のコレクション、ナポレオンの帽子と勲章、民族学博物館からは、ブリティッシュ・コロンビアの木彫りのトーテムポールと舟、エジプト館からは、有名なネフェルティティ女王の胸像と金の装身具とスカラベのコレクションなどがありました。

ほかに、テラコッタ製の立像や採色された壺、宝石用原石とカメオがいっぱいつまった戸棚、ベルガモンの大祭壇の巨大なレリーフなどもありました。

このネフェルティティ女王の胸像、非常に美しい見事なものですが、これは現在ベルリンの「新博物館」に展示されていますが、博物館自体は写真を撮ってもいいよ、というところなのですが、なぜか、この女王の胸像のある部屋だけは一切写真を撮ってはならない、というところです。というのは、これはエジプトから返還要求が出されているのでね、不当に持ち去られている物だから、戻せ、という要求がかなり強く出されている物でもあります。

1941 年の後半に高射砲塔に運び込まれたのですけれども、これは誰もが一時的な保管場所で、戦争が終わればまたもとに戻るんだというふうに思っていたわけですけれども、3 年半後、1945 年にソ連軍の戦車がベルリンへやってきました。「財宝の数メートル先まで迫っていた」なんて書きましたけれども、ドイツが降伏した 45 年の 5 月の末、シュリーマンの宝物を納めた 3 つの木箱、これはより安全な場所に保護するんだ、とそういう約束の下に、ソ連軍のトラックで運び去られてしまいます。その後、これが長らく行方不明になってしまうのですね。

1990 年、ベルリンではシユリーマンの没後 100 年を記念した展覧会が開かれました。しかし先史原史博物館に展示された「トロイアの黄金」は、悲しいかなすべてレプリカでした。世界中の学者たちの探索にもかかわらず、シユリーマンの発掘品の行方は杳として知れなかったのです。ちょうど同じ頃、モスクワでは 2 人の若手美術史家、コンスタンティン・アキンシャとグリゴリィ・コズロフが、「黄金」の在り処をつきとめていました。コズロフが偶然に発見したベルリンからモスクワ宛の美術品送付リスト、モスクワへの到着の確認書などから、半世紀前の「トロイアの黄金」の移送の過程が、はっきりと浮かびあがってきたのです。

45 年 5 月末にツオー高射砲塔から運び去られた 3 つの木箱は、6 月 30 日、モスクワの空港に到着。これがベルリンから送られてきた戦利美術品の第 1 便であり、10 日後にはプーシキン美術館に運びこまれる……。

2 人はこの新発見を 91 年 4 月、アメリカの美術雑誌「Art news」に発表し、ソヴィエト政府のドギモを抜いたばかりでなく、世界中を驚愕させました。その後の続報記事や内側の声によって、今年 4 月ついにプーシキン美術館は「トロイアの黄金」を公開しました。

仕方なく、なんでしょうか、1996 年「プーシキン美術館」は確かに、うちにあるよ、ということを言った上で、トロイの黄金を公開しました。左側はその時の展示の写真だそうです。

現在、ベルリンの「新博物館」に「シュリーマンの部屋」というのがあるのですけれども、そこではレプリカ 2 点ほど展示されているという状況になっています。

時間が来てしまいましたが、先程言いましたように人災は災害の一種でもある、ということでこじつけました。

ここから先は、次回にまわしたく思います。動物園と、それから他の人と人災というのを、やってみようと思います。

というわけで、…これで終わりに致します。

どうもありがとうございました。

（拍手）

司会：はい、鷹野館長、どうもお疲れ様でした。…次回は 10 月の 31 日、10 月の最終日になりますけれども、「博物館で起きた事件」ということで、博物館でどういう事件が起きたのか、いろいろ面白い話があると思いますので、また 10 月の 30 日に来ていただければ、と思います。

今日は、どうもありがとうございました。

（拍手）